いつでも

歎異抄

たん　に　しょう

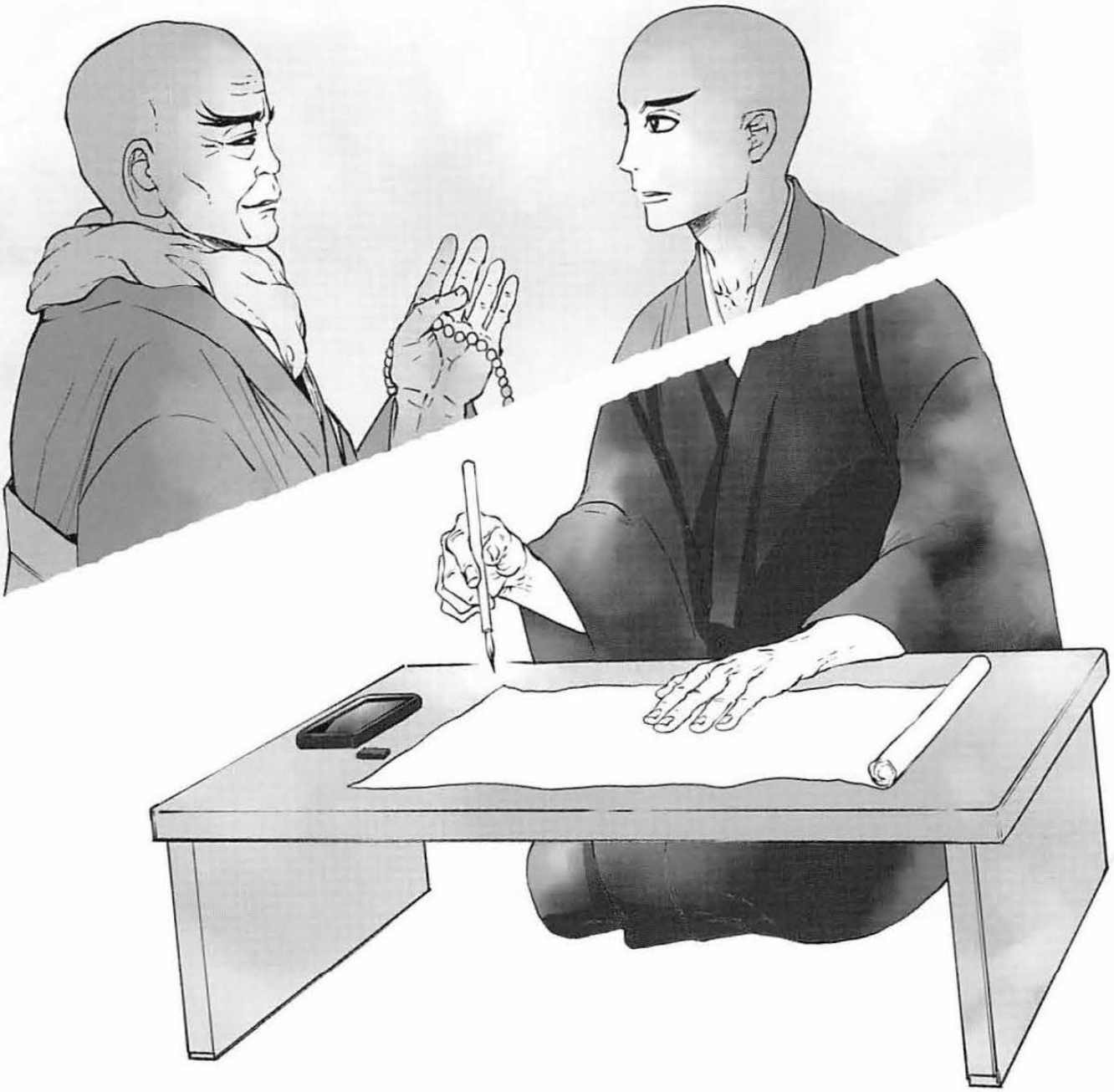
意訳 井上見淳　イラスト 一ノ瀬かおる
編集 井上見淳　浄土真宗本願寺派総合研究所

ひとへに親鸞一人がためなりけり

音読に適した本文で
読む

書き下ろしイラストで
感じる

ドラマティックな意訳で
思い浮かべる



第五条

亡き父母に何をしてあげられるか

「念仏一つ」と言っても
受け止め方はいろいろでの。
たとえば自分が念仏を称(となな)えた功徳(くどく)で
先立った人を救うてあげたい、と
こう言う者が
しばしばおるじゃろうが。
お前さんらの中にも
こう思うとる者おらんか？
でもな、親鸞(しんらん)さまは
こんなふうに言われておった……。

音読してみる

一　親鸞は父母の*孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

そのゆゑは、一切の有情は みなもって世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この*順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

わがちからにて はげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。

ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもって、まづ有縁を度すべきなりと云々。

孝養　ここでは追善供養のこと。追善供養とは、人の死後、死者に縁のある生存者が、その死者がより良いところへ生まれられるよう、あとから追って、読経などといった善事を行うこと。

順次生　現世の命が終わって、次に受ける生。

思い浮かべてみる

この親鸞は、先立った父上や母上へこの功徳を送って助けてやりたい、などと思うて念仏を申したことは、ただの一度もない。

なぜかと言うとな、いまこの世に生きておる者は、みな果てしなく遠い過去世から、何度も何度も生まれ変わって来ておる者たちばかりじゃ。つまりどの者を見ても、あるときは親子だったかしらん、あるときは兄弟だったかしらん、そんな間柄ということになるわな。だったらこの命が終わって仏となったときには、この世で縁のあった親だけというわけにはいかんよ。どの者も救うていかねばならんということになるな。

それに念仏がな、わしらが気持ちを込めて称えることで功徳が積み上がっていくような、そんな行だったら、親のために功徳を積み上げていこうという発想も出てくるんだろうが、念仏は、そんな行ではないわな。

そういう念仏によって自分が救ってやろうなんて発想はもう捨てて、阿弥陀さまにみなおまかせしてしまってな、このたびの命を終えすぐに浄土でまことのさとりをひらかせてもらったなら、たとえ先立った父上や母上が迷いの世界でどんな状態にあったとしても、そのときは身についた自由自在で不可思議なはたらきによって、まず縁の深かった者から救うたらよい。

とこう言っておられた。

Point 近しい人への情愛が自力の落とし穴

「両親のために念仏したことなど、ただの一度もない」。親鸞さまは、親不孝なあるいは両親に恨みを持った人なのでしょうか。決してそうではありません。まず救済の対象の視点として、「救いの対象は自分の両親だけという狭い範囲ではない」ということです。そして、救済の方法の視点として、私たちは、亡き人たちに追善（41頁「孝養」の項参照）できるものは何も持っていないのです。1円の持ち合わせもないのに、人におごってあげることはできません。さらに言えば、念仏は追善に利用するものではありません。「追善供養のため」、「ご利益のため」。念仏は、私たちの自分勝手な思いで利用するのではなく、阿弥陀さまのお慈悲が、私にはたらいているすがたそのものです。